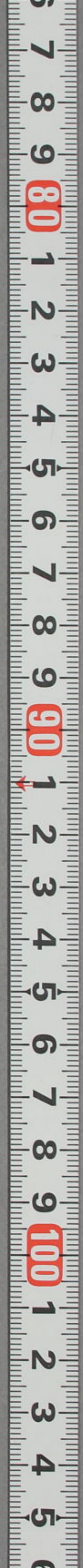


南畝莠言

蜀山人集  
上

15  
1376  
1



45  
1376  
1

南畝著言列

國英

予幼好讀書。家貧乏書。或借友人。或購諸  
市中。歲節緇衣食。購得書卷。世故紛紜。老  
亦至矣。自少至老。抄書不倦。遇見警觀。皆  
印疏記。積為數卷。管公不云乎。學問之道。  
抄出為宗。予竊欽焉。又寶亭見而悅之。与  
圭埤亦星岩課。但抄隨刻。且。而示之。流  
觀一過。不復詮次。而亦。不常。送秉

昭和六年  
六月廿四日  
小田新吉  
長男友石  
氏書贈

滞穂。其於苑苑也。若苗之有莠也。名曰莠  
 言者爲之也。吁。歲垂七十。而不若一見。不  
 爲一事。其驕者。亦是自口。因不足取笑  
 於大方也。恐指摘於考據之家矣。唯使吾  
 家兒孫。謂祖翁亦解讀書則可矣。丁丑小  
 春。杏花園主人識。



南畝莠言卷之上目錄

- ① 二十六夜の二尊の光
- ② 八朝十五夜十三夜の名
- ③ 七ツ目の干支
- ④ 時雨のやみ發句
- ⑤ 紫門ハ紫のトエあど
- ⑥ 人間六十二年の身
- ⑦ 歳旦并年号の一字十二支と配く年と記と
- ⑧ 道澄寺の号
- ⑨ 寺号あまの又山号あまの
- ⑩ 屋造り倒柱と忌む
- ⑪ 酢吸の三聖并圖

南畝翁言卷之上目錄  
 一 二十六夜の二尊の光  
 二 八朝十五夜十三夜の名  
 三 七ツ目の干支  
 四 時雨のやみ發句  
 五 紫門ハ紫のトエあど  
 六 人間六十二年の身  
 七 歳旦并年号の一字十二支と配く年と記と  
 八 道澄寺の号  
 九 寺号あまの又山号あまの  
 十 屋造り倒柱と忌む  
 十一 酢吸の三聖并圖

楓橋寺  
 徒然草より小雪の分并鎌倉聚樂の小より又り  
 草牛よりいへる廳子入  
 六十二年目の暦と用申  
 水引  
 紙鶴と放り糸とやま  
 鐘と鑄り女と長  
 芦のちり屋  
 倡妓の名と世  
 火の用心の水溜桶  
 舟のあゆみ板  
 善財と道具

刀の大小  
 神田明神  
 人事  
 南掌國より清朝へ象と貢  
 名画と對幅  
 色紙  
 館賣の笛  
 文箱の蓋の上の漆  
 人の家居の床柱と皮つと用申  
 瓜と喰り鬼と  
 糸と慶早牙

⑤ 禾と八木とらふ

⑥ 藏の棟木とらふ

⑦ 書状子恐悦の字

⑧ 童子の戯目比膝挾

⑨ 鬼ぐらゝの戯

⑩ 鶴乱と博乱とらふ

⑪ 瓜戦

⑫ 瀬戸物

⑬ 前裁前水

⑭ 憑子

⑮ 五色の月笠

⑯ 夏の雨馬の背とらふ

⑰ 蚊のほらとらふ

⑱ 唐の双陸并圖

⑲ 正月の氣のそら

⑳ 子と親分

㉑ 辻番の布子

㉒ 俵の字

㉓ 尾刈熱田の揚貴妃乃祠

㉔ 今所とよあゝ發向の碑

㉕ 南禅院の名木

㉖ 陶潤明の菊王子猷の竹

㉗ 峠とらふ字

⑤ 茅屋根と改く瓦屋よとての令

④ 画の標榜

③ 古列女傳周室之母の傳文

② 具足櫃子春画のしり

① 今十七史と宋遼金元四朝別史と加く廿二史とて

⑥ 笠と出い笠と上り降とて

⑦ 土佐國同年の侍二人の働

⑧ 不成就日

⑨ 日觀要考

⑩ 細敷天神の讃岐圓座

⑪ 上利劍

⑫ 布袋川のしり

⑬ 春抄四月朔日とて

⑭ 本卦のしり

⑮ 大師河原の碑

⑯ 鶴満丸の名

⑰ 庚摺石并圖

⑱ 須磨寺の判札

⑲ 自休兒の潤

⑳ 國號子陽の字と用

㉑ 前明のしり語

㉒ 一種の七種

㉓ 太閤秀吉公清見寺の和歌并序又西三條實澄卿の詩

㉔ 石川文山扇の銘

- ⑤ 但徠古今集とくわん
- ⑥ 狂歌集と南郷の序
- ⑦ 和歌と詩と譯と
- ⑧ 新井白石容奇の詩
- ⑨ 干菓子
- ⑩ 味噌
- ⑪ 輕
- ⑫ さあざり山椒
- ⑬ 菊の葉のりあげ
- ⑭ 菖蒲茶
- ⑮ 足利学校易の事

卷上目録畢

- ① 卷下目録
- ① 升平昇平の文字
- ② 平相國の法名
- ③ 松殿攝政資盛と乗合の異同
- ④ 尊氏公安國寺とくわん
- ⑤ 海水赤色と変じ
- ⑥ 香月牛山西瓜の事又松岡玄達と徠徠と贈詩
- ⑦ 普濟寺の石幢并圖
- ⑧ 武州赤塚大堂の鐘銘
- ⑨ 古の寺社の教
- ⑩ 南郷翁のわん文
- ⑪ 新宅三年煤とくわん

- ① 達磨忌
- ② 八丈島為朝の遺物并圖
- ③ 再昌院北村翁の墓
- ④ 東坡三度赤壁子抄
- ⑤ 低枕の養生
- ⑥ 宋人雪舟の画と賞
- ⑦ 史記抄子ある史記家漢書家并師行未師行の事
- ⑧ 同書子ある應仁の乱の實録
- ⑨ 朝鮮板の法華科注三百年餘の本
- ⑩ 山谷の書と學ぶ事
- ⑪ 元真寺の鬼面并圖
- ⑫ 一節切尺八の考と并圖

- ⑬ 調子肝要の事
- ⑭ 人々々の扇帝の書
- ⑮ 美濃と近江の寐物語
- ⑯ 美濃の念佛橋
- ⑰ 目黒の地名
- ⑱ 滕文公の領分并漢の世物價の考
- ⑳ 乾隆の初麒麟出の事并圖

總目錄畢



南畝著言卷之上

杏花園主人著

門人丈寶亭筆錄



一 明の薛文清公の撰録云二十三日深夜深時月初出  
 東方其終魄于東之光比未望載魄之光を光明者蓋初  
 昇之日光を甚西下之日故其光明如此云按之  
 今世俗は二十三日の月と拜し月出の時ニとも  
 二 八朔と持世之節より僧義堂の空華日工集の  
 云え八月十五日と桂院令九月十日之夜と継華會と云  
 俗は真俗を交雜し  
 三 俗は己がまかりし年の十二支よりセツ目より  
 かの形と画びしりしりありし龍頭新字元龜大全

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 日, 月, 星, 雲, 霧, 雪, 霜, 露, 雨, 風, 雷, 電, 雲, 霧, 雪, 霜, 露, 雨, 風, 雷, 電]*

一、二の中、十二、相冲子午、相冲寅申、冲午酉、  
相冲辰戌、相冲巳亥、冲丑未、相冲卯辰、  
相冲巳午、相冲申酉、  
相冲戌亥、

四、世より宗祖の時、  
世より宗祖の時、

此二句、人の言ふ事、  
此二句、人の言ふ事、

清の趙恒夫が寄園寄所寄、  
清の趙恒夫が寄園寄所寄、

傳贊、清真守道、  
傳贊、清真守道、

揚震傳、柴門絶、  
揚震傳、柴門絶、

七、僧横川が京華集、  
七、僧横川が京華集、

又五山の僧徒り年と紀とるの年号の一をとりて十二支  
とまゝくすゝ横川の京華集に應仁元年丁亥と仁亥と  
紀一万里の帳中香子延徳二年辛亥と延亥と紀とる  
一のしに聯珠詩格の序番易大徳元年丁酉と紀とる  
徳西とあるはあつては形とる

八格古要論二卷趙景安雲麓漫抄引唐野史載智永所居  
之寺曰雲門會誓志則云智永與其兄惠欣本住郡之嘉  
祥寺右軍舊宅也梁武以二僧能從釋教合二名改賜額  
永做云此方と和州宗山寺にあつたの山母道同のまゝと  
道澄寺の鐘の銘と云

道澄寺者從三位守大納言兼右近衛大將行皇太子傳藤  
原朝臣參議左大臣從四位上兼行勳解由長官播磨權守

橘朝臣為報四恩濟六趣合誠戮力所建立也故各取其  
名首字以為此寺額題所以貽本緒於來代期同志於他生

也按之ふは系系朝臣名は道明橋銘名は澄清ありとる  
のなほ首字とるは道澄寺と名づけしは永欣寺のまゝとる

又因樹屋書影に曰唐碑制度極多有二人製序  
一人製銘者故尹師魯志張克夫墓序而歐陽為之銘嘗考張

說文集所為上官昭容銘其序則蘊題作也此可以證とる  
按之は本朝高雄山の鐘は橋廣相の存とるは菅原是善の

銘ありとるは唐のまゝとるは徐氏筆精とるは此のまゝとる  
と誌に銘に兩年のまゝとるは

九明禪友夏嶽歸堂合集の中に重修寶峰山觀音寺碑記云  
邑志載宝峰山觀音寺創自天順年間即今所謂十八湾觀音



東坡先生懿蹟圖中  
所載三酸圖

山谷

文宝縮圖



東坡

佛印

書舟々ツ然レバ昔ハ封橋寺ナルヲ後ニ楓橋寺トバシユタカ又寺  
前ニ茶屋ガ有レガ其額ヲ江村トウツタツ寒山寺トハ楓橋寺ノ  
佛殿ノ本尊ガ寒山拾得ジヤツアルホドニ寒山寺トモ云ゾ鐘ハ佛殿  
ト法堂ノ間ニアルゾ銘ヲ夜半鐘トキワタツ此義ハ常菴ノ講ツ  
即自筆ノ抄ニモカク書舟々ツケラレタツ又天龍策彦ガ南遊蒙テ楓  
橋ノ詩楓橋未断僅看蹤人物難逢境易逢張継去来無宿客旧時山  
旧時鐘ト云々五山ノ諸老用遊ト云々見景ノ  
めア一今ノ世ハ人物ノ逢ジシモノニキレ境ノカキ  
か  
 十三 羅山先生ツルキ野植ヲ云ぬれトゆききんべのこ松よとら  
事ト云ハ  
 事ト云ハ  
 事ト云ハ

しよーとあるおまーしと昔よりいさる事と在鳥羽院様  
那く終りしよーと雪のふりまかく作れきるうー横は典侍日記  
カキキノッラユキガトオニラキ子母子のうま書靴しりまの母ふ  
つど終りしよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様  
りしよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様  
せよしよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様  
のれしよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様  
音の終りしよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様  
俗間しよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様  
んましよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様  
あろしよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様  
うらしよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様

あしよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様  
しよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様  
くしよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様  
ろしよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様  
あしよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様  
のれしよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様  
音の終りしよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様  
俗間しよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様  
んましよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様  
あろしよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様  
うらしよーと昔よりいさる事と在鳥羽院様



王海嘉慶三年四月十日甲寅泰茂乘牛昇坂敷上  
 為問其事所召也占云下人之中喧嘩更云可五日之中已日  
 可慎云云伴牛則給陰陽師也又天慶之中大臣可有慎更云云  
 又云兼安三年七月十六日丁未中畧今日家中牛昇仍給陰陽  
 師仰後了牛と陰陽師の例の事  
 ④ 吳郡の顧珩が海撰餘録云儋耳孤懸海島曆書家不能備其黎村  
 各一老習知節候与吉凶避忌之略与曆不爽毫髮大率以六十年已  
 往之跡徵驗將來固亦有機巧不能測知嘗取其本熟視字畫批謬不可  
 識詢其名則曰曆底記今俗子六十一日去曆の事  
 ⑤ 正字通彙字の下今切彙曰水引六朝人常言水引餅  
 水引水引餅

按水引の形似水引餅  
 揚子方言云終謂之郭注所以轉糞給車也此給の事  
 ① 小見の紙紙を放し絲とす  
 ② 物理小識云鑄劍鑄鐘合煉丹藥皆忌裙釵之塵  
 ③ 釋名云草圓屋曰蒲二敷也總其上而敷下也又謂之庵二庵  
 ④ 明陳繼儒が記事珠宋曾三異が因話錄と引く即中倡女  
 常擇一人名以莫愁示存古意亦僭甚矣按今市中之門口よ火の用心水溜桶防虞缸桶と引く  
 ⑤ 今市中之門口よ火の用心水溜桶防虞缸桶と引く







いひ

③ 俗忌よりのいひきりてせまりのいひは男女不親授の禮の送るふまづ物に裁縫の具と女のいひは

④ 文箱のうらみよと朱漆の紅簽の遺言

⑤ 人の家屏の床燈はつとを用ひりて穀梁傳曰禮天子之抽斲之麓之加密石焉諸侯之抽斲之麓之大夫斲之士斲本令の房はらばつとて古人のいひは

⑥ 世俗瓜と割り上の方とて先とて鬼とて

⑦ 禮記玉藻子瓜祭上環食中棄所操とて鬼神とて天子諸侯大夫庶人の瓜と

⑧ 禮も曲禮も

⑨ 精と茶と麩牙とて俗の後の牙とて

⑩ 日本紀畧花山院寛和元年三月十八日の記

⑪ 施以麩牙百許又明月記源平盛衰記

⑫ 茶とハ木とて小新宮太方殿實資の小右記

⑬ 茶の棟木と牛とて汗牛充棟

⑭ 世俗まじりのいひは

⑮ 中山内太方殿の貴嶺問答

⑯ 相半といふ

⑰

⑱



之奇惜未能採筆賦之耳

又階園詩話十五卷云余自幼聞月華之說終未見也同年王大司農

秋瑞夢月華而生故小字華官後見平湖陸陸堂先生云康熙辛酉

八月十四夜曾見月當正午輪之西南角忽吐白光一道已而紅光紺

碧約有二十餘條下垂至地良久結輪三匝見月不見天矣先生賦云

今宵才見月華圓織女張機也失妍五色流蕪齊着地三重輪廓欲

彌天先生名奎勳云云 余聞之明和八年辛卯九月十日夜

小島橋洲名茶從今夕子月華之

其夕子月華之

立松名樓之子月華之

巽續博物志云俗以五月雨為合龍雨一日隔轍雨梅之

夏之雨馬之背

巽世俗子月華之正月の家引

虫出

格

圖

近比水晶宮

西遊記

似

之

之

之

之

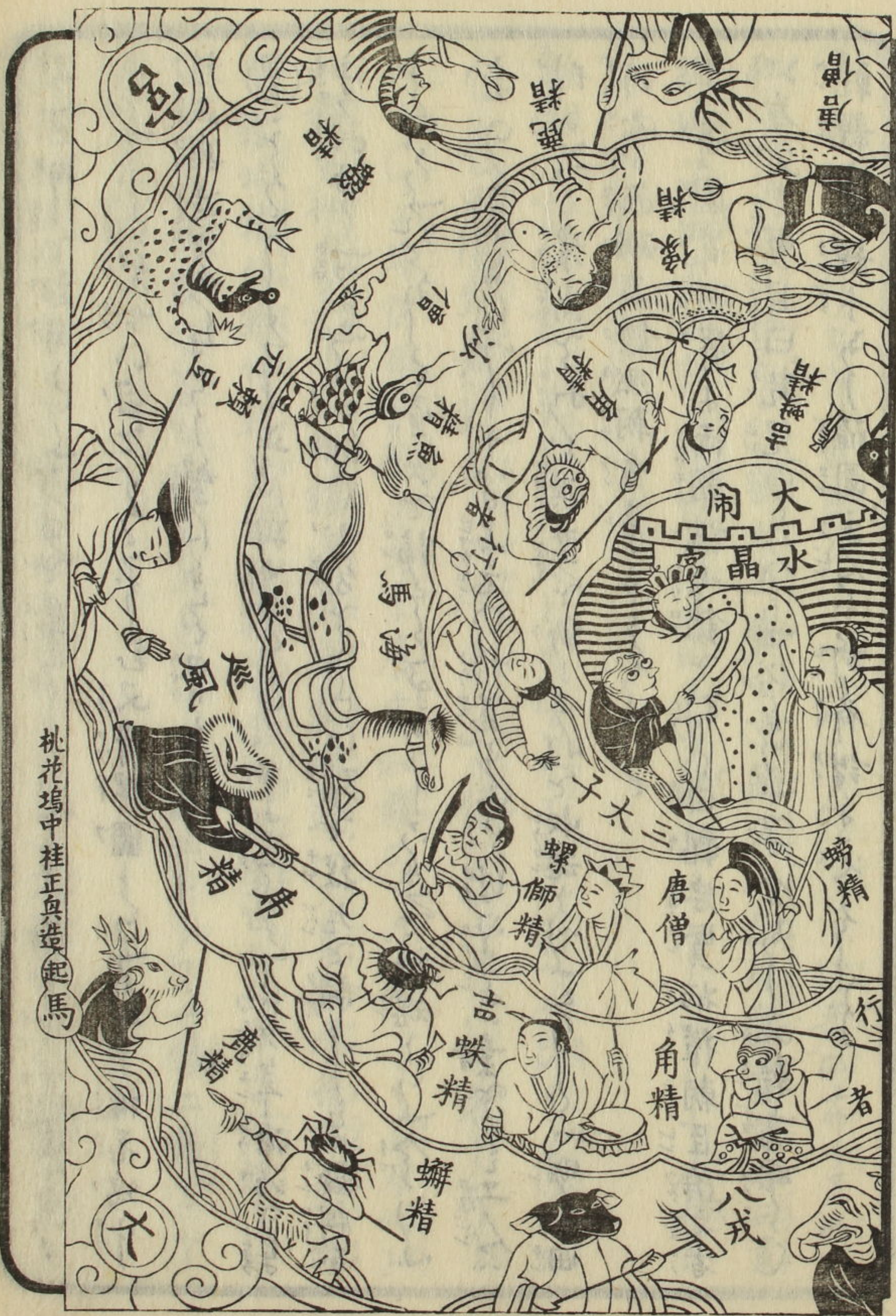
之

之

之

之

之



桃花塢中桂正真造起馬



大水晶宮圖

文宝亭縮圖

ふり出ると起馬ふりふり馬子と云ふ事あり今其國を  
こころし〜兒女の日を〜又骨牌圖〜桃花塙中  
桂正奥造と云ふ事あり繁けり〜

○罪 正月朔日〜十八日〜  
言の申〜  
氣の〜十八日〜  
拜子〜  
海内〜西湖志餘熙朝樂事〜

○辛 寄園寄所寄子兩朝識小録と引〜曰魏忠賢柄權朝臣附之者  
以為父忠賢目曰乾兒〜俗より〜  
乾親家〜  
乾親家〜  
乾親家〜

○聖 鄙俗のり〜前句〜  
入〜  
綿襖子出矢注謂日煖也〜同日の談〜  
ハ〜

○聖 俵の字字書〜  
〜甲陽軍鑑〜  
〜  
和雜〜  
寄雜均雜俵雜博雜〜  
〜  
〜

○聖 屋別熱田子古〜楊美妃の祠〜元祿中〜林の

五輪の墓石あつて揚肥の墓のいけりて其ら神職毀す

寄園寄所寄云奇雲天門奇勝巖下碑碣墳墓可厭遊人好題亦

是一僻任其土者薰習成風朱書白榜卷石皆徧冷人氣短余謂律中盜

山伐鑛皆有常刑俗士毀汚山靈而律不禁何也解購今亦其誹諧

原の受るの碑も又少くもるべし

壘僧万里の帳中香下之移竹詩の注云本邦龜山法皇於東洛龍阜之離

宮南禪院聚吉野櫻難波葦立田楓住吉松等栽泉石之池邊丁亥駿骨以

来不存一株哀哉丁亥駿骨へ意仁の私とつり

陳陶淵明の菊王子猷の竹林逋が梅用落叔の蓮ハ人ふふふふふ

陳白沙の木犀花をてて一揮友夏の紅葉を其詩をくく

作殿切音薦俗謂屋斜用竿以土石遮水亦曰竿篇海竿亦

俗語よツカフといふ是れスケカフの音ハ轉じふふ

峯とて字甲陽軍鑑よに到下と主臥雲日伴録よ江文塔と

あり中國と峯といふとタラといふと峯市佐野のタラといふ

タラといふと

堯玄宗時宋璟為廣州都督廣州旧俗皆以竹茅為屋屨有火

災璟教人燒瓦改造店肆自是無復延燒之患人皆懷惠立頌

以紀其政と旧唐書本傳よにありあり按ふふふふふ

をよ子茅を根を改く瓦を子とて今ありふふ

卒佩文之書画譜捲孔子見老子画像人物七車二馬三標榜四惟老

子後一榜漫滅云云抄よに標榜といふの夕と主所ふふ

画一今画圖よある方圖

画一今画圖よある方圖



○空 刘向古列女傳周室三母云太妃者武王之母禹后云卒成武王周  
公之徳より君子謂太妃仁明而有徳子いゝ間日旧刻教十句あり其  
中子いゝる子あり蓋十子之中惟武王周公成聖要其安及以播烈光  
制禮以廣達孝而言之則盛徳自然著矣若管蔡監殷而畔乃人才  
質不同有不可以少加重任者易曰力小而任重鮮不及矣及反思其  
受教之時未必至於斯也豈可以累太妃耶とあり昔年丹室と接  
し附化者い言の窮をいふとありいゝ思ひいゝ嘉慶元年丙辰板の  
新刻の古列女傳とありいゝ此教十句と刪去せらるゝ其外改訂とあり余子附て  
異同と訂りて元和の願廣折り撰りて宋校の本よりいゝとあり  
○空 青藤山人路史といふあり士人爲まはるゝ多しこれ櫃といふ  
必し一冊づゝ入るゝとありいゝ人其いゝとありいゝ火字とあり  
殿勝りといふ云此方より具足櫃と春画といふとありいゝとありいゝ

あゝいゝとありいゝ

○空 今十七史の宋遼金元四朝別史を加へて廿一史といふ嘉慶のいゝ  
席世臣が掃葉山房のいゝとありいゝとありいゝ宋遼金元別史の存儀徴  
阮元が文の南康謝啓昆が文の省の裁を是の正史と参考とありいゝ  
阮正史の附庸といふとありいゝとありいゝ宋遼金元別史と  
題いゝ孤行といふとありいゝとありいゝ又大金國志といふ孤行といふとありいゝ席  
世臣が序の乾隆年月表校上の文の經緯大金國志表一全圖世系圖ありいゝ  
の廿一史本并に宋遼金元四朝別史本といふとありいゝ省の載を全圖九主年譜  
いゝとありいゝ下諸本といふとありいゝとありいゝとありいゝとありいゝ  
○空 歴代記自天文十五年 號日吉元服記城ノ本人出羽守モ加勢ノ人々モ不  
叶シテ是モ城中ヨリ笠立ラ出シイロク嗜テ丁未三月廿二日ニ城ヲアケ  
テワタルル又同年五月五日ヨリ薬師寺于一カ楯コモリシ芥田川

止

城責ラる暗元モ讚岐守畠山総列モ自身亦夕チ数日雨春セメタ  
マハバ城モ叶ハズシテ上テ降ヲ請ケリ拵ビシカキ出  
差トヨクシテ降トヨクシテ

⑤長元記云土佐幡多郡歳同年之侍二人此親ハ討死也高知行ノ跡ナ  
レバ役儀之人數召列從歳十三陣ニ立テ十六歳ノ正月ニ北川三嶋ノ城乘  
入時二人ハ本丸ノ一番家也去共諸人ニ被追立処ニ立返メ乘時モ一番  
乗也諸人見聞母沙汰耳此光富ト云人ハ物大將之嫡子也後ニ光富權  
之助而二人之指折ニ入大將也同年之今一人ハ國人ノ嫡子也北川殿為被  
居ニ之丸へ乘入処諸人敵ニ被追立散ニニナル時以鐘二本突込ヲ見テ  
彼人之被官漸ク一人返來テ主人ヲ助退防所ヲ敵鐘二本ニテ切  
岸へ彼被官ヲ突付ル其時ニ主人十六七間返シ來テ彼被官ヲ助  
タリ此被官鐘痕ヲ二十七ヶ所負共此時不死一先ハ被官ニ被助

一先ハ主人被官ヲ助ク主從ノ有様ヲ陣中ノ諸人此沙汰耳如  
件拵トシテ土佐軍記二人ノ指折ノ業名孫次多清光富拵ト助  
幡多郡立石右京進十六歳北川子孫。ニの丸乗付テ追立敵ノ鐘  
二本子突込被友子織部ト云者アリ來テ敵ト追拂ク主ト助ク  
其後織部切腹ノ鐘ニテ突付ク討死ト云事ト存系進ニ  
切クシテ織部ト云事ト存系進ニ  
肩ヲ退クシテ存系進ヲ助ケテ主從ノ御免アリ織部  
も不死リシテ存系進ハ主從ノ御免アリ織部  
姓名ヲ存系進ハ主從ノ御免アリ織部  
⑤世俗に正月ノ初ノ月ニ二二七ノ月ニ三月進ニ四五六ノ録  
ク九日ノ不慮録日ノ初ノ月ニ二二七ノ月ニ三月進ニ四五六ノ録  
寛文板の大難書ト云事ト存系進ニ







但此中ハ仙内ニある松井ハ誤りト音假ヨリトアヤナリ

僧横川ハ京華集子戊子五月廿七日宿北岩藏松月菴ニ

主出唐紙一片請余天神七字号且求題其上曾問北禅老師

語録有贊六歳童所昼七字之語余亦傲之六歳童者盖鶴滿

九云者歎トアリ抄ニ録倉志云在栢天神ハ神宝ヲ抄

名号幅舒滿九ト云々トアリ相傳フ親書上人ノ童又ナリト

陸奥國福島領山口村ハ庄惣名アリ土人ハ誤リト云

昔年伊予ノ忍ノ山ノ寺ニ結々伊予ノ母アリ云々

親トスノ面ニ彫ル丹青ノ筆ニテ漆細布ヨリト云々

星解ノ夜ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

抄ニ云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

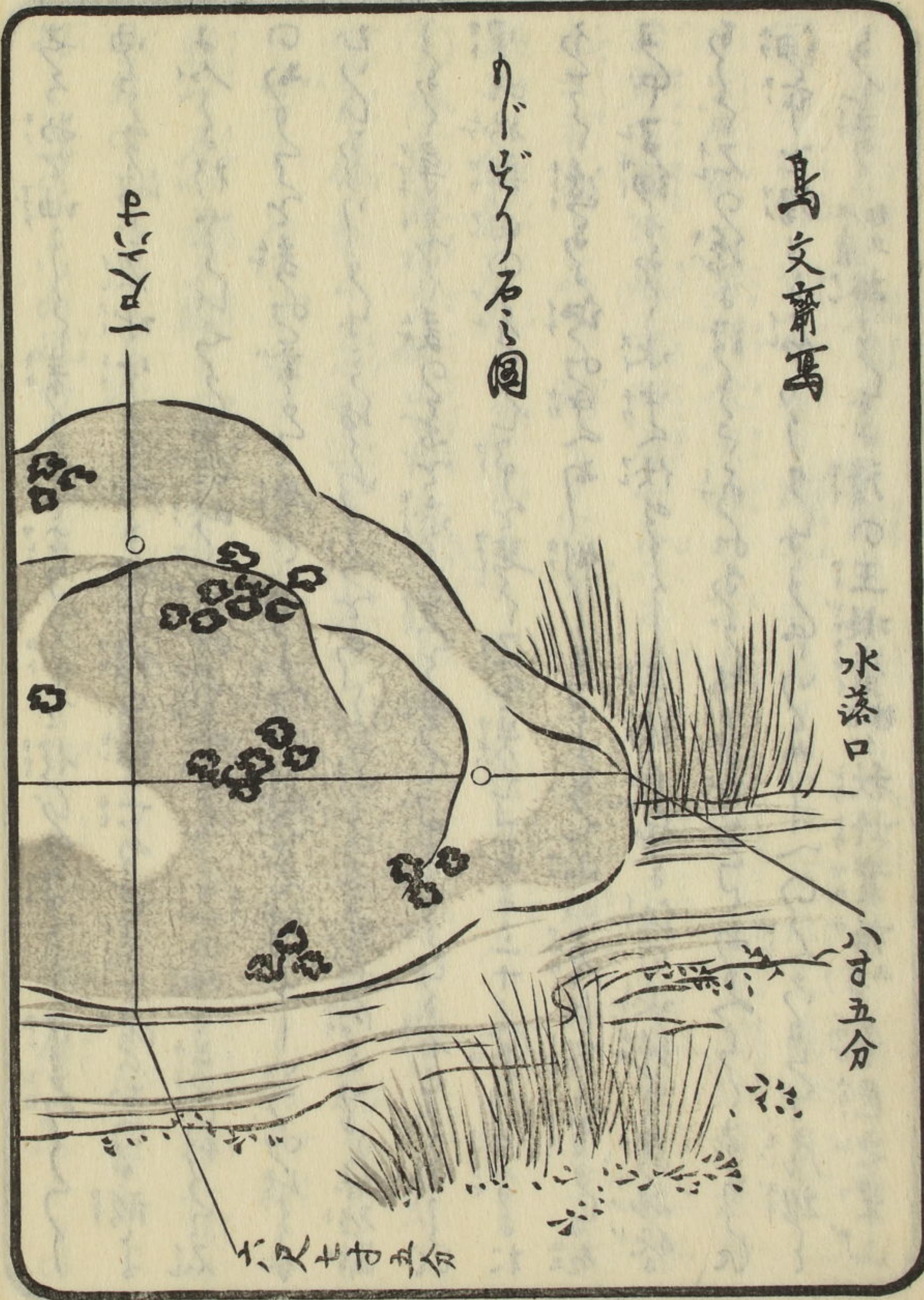
云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々

云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々ト云々



島文齋寫

石の頂





頂方寸標

此為江南所產一  
枝於折盜之軍者  
任天永紅葉之例

伐一枝者下勞  
一梢

秀永三年二月日

文室縮寫

世

世

の制れを「諸」よつて「則禁制」のれは「此」一柱「一葉」  
筆「筆」も「筆」も「筆」も「筆」も「筆」も「筆」も「筆」も「筆」も  
よら「よら」の「よら」の「よら」の「よら」の「よら」の「よら」の「よら」の  
も「も」の「も」の「も」の「も」の「も」の「も」の「も」の「も」の  
札「札」の「札」の「札」の「札」の「札」の「札」の「札」の「札」の

◎淡海録云題竹生島果南自休相列録倉建長寺僧寓佛通  
寺初居藝列根谷因之曰根自休閑說江湖跨半列撞天一嶋  
勢如淳倚松松去老龍骨座石收来猛虎頭綠樹影沈魚上樹  
清波日落兔奔流密蹤高聳在今古不断神風海渡舟已れつて  
文化二年乙丑十月廿二日安藝國彦根郡彦根市  
字の區家あつて釋自休筆とあつて此自休のつとを載く初居彦根列

松谷とあつては此自休のつとを載く初居彦根列  
長寺ノ廣徳菴ニ自休藏主ト云僧アリ奥州志信ノ人ナリ江島へ百日泰  
詣シケルニ雪ノ下相兼院ノ白菊ト云見是モ江島へ泰詣シケルニ自休藏  
主邂逅シテゲリイカニモシテ忍ヨルベキ便ヲ云ケレトモ絶テ其返事ダ  
ニナシ枕サセテ云聞スレバ白菊センカタナクテ或夜ニギレ出テ又江島  
へ行扇子ニ歌ヲ主テ渡守ヲ頼ミ我ヲ尋ル人アラバ見セヨトテカク  
ナン白菊トシノブノサトノ人トシ思ヒ入江ノ島トコタヘヨ又  
ウキコトヲ思ヒ入江ノ島カケニ捨ル命ハ波ノ下草ト詠テ此測ニ  
身ヲ投タリ自休尋来テ此事ヲ聞カク思ヒツケル懸崖  
峻處捨生涯十有餘霜在刹那花質紅顔辟岩石娥眉翠黛接  
塵砂衣襟只湿千行淚扇子空留二首歌相對言愁思切着  
繪為孰促歸家又歌ニ白菊ノ花ノナサケノ深キ海ニトモニ入江ノ









亦或有古蒙莊者出一遇之別其必以為開口大笑者旦暮遇

之也已龍飛癸巳晚夏

南郭散人題

抄之龍飛癸巳正德三年之此年初年也他之文集

載之乎一若本由己理菴と移之柳澤家の醫あり徂來集の

題藤理菴卷七終あり稷下聲名自古聞雕龍矣穀日紛ニ最

憐侍宴歸來晚懷肉還應餽細君

(全) 豊後三浦安貞の詩轍子云高師直鹽冶判官ノ妻ニ貽ル返ス

廿へ午ヤフレケント思フニシ我文ナカラホモヲカレズト云歌ヲ徂

徂譯シテ

我思美人貽之書 美人不見桑庭除

吾拾吾書歸十整 心謂美人手所觸

ト譯シタリ月ヲミントテ為セシレバ空ニ知ラレヌ微雪フルト云フ歟

長崎ニテハヤリシラ或人清人ニ譯ヲ乞フ清人即吟メ曰

欲見嫦娥望白雲 春月朦朧微雪紛

是等切意ナルベシ徂徠ノ譯若韻アラバ翻付トイハンモ可ナラン云

近之詠諧師琴太が最白よみし中あはれしつゝの松の月と

は清人程劍南の詩よつゝを思ひし長夏草堂寂連霄聽雨

眠何時懸月色松影落庭前抄之乎惜らる其情景とつゝ

杏園主人我子明人の日本風土記の例よみしなむ譯ノ也

五月雨耶阿兒夜披促革尼松那月

呼音 五月雨撒密他列夜要 松麼子 月雲氣

讀法 撒密他列耶阿兒要披促革尼麼子那紫氣

釋音 五月雨 善耶 助格 阿兒夜 夜披促革 微尼 助格 松 正音 那 助格 月 正音

切意 尋常 五月多陰雨一夜松間微月露

是より明少少ア

同書又云八居題詠附録新井白石容奇ノ詩アリ曰

曾下瓊鉞初試雪 紛ニ五節舞容間

一痕明月茅渚里 死片落花滋賀山

提劍膳臣尋虎跡 捲簾清氏對龍顏

盆梅剪尽能留客 湊得隆冬無限艱

近刻日本詩史此詩ヲ載セテ曰白石冬冬日人ヲ訪フ主人容奇ノ字ヲ

昏メ示ス白石是雪ナルヲ知テ此詩ヲ賦スト杏園主人就子類子儼

紫氣及法乃の詩とつゝ此所

紫氣

日下曾生第二尊 雲梯攀尽向天門

風光浪冷瀕廢浦 草色秋深武野原

回首晁卿望本國 經年在五哀王孫

何人更伐庭前桂 逆旅良宵對酒樽

法乃

朝慈初發一枝花 百世流芳勢海涯

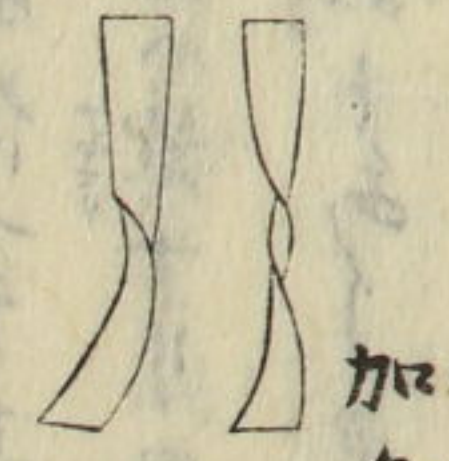
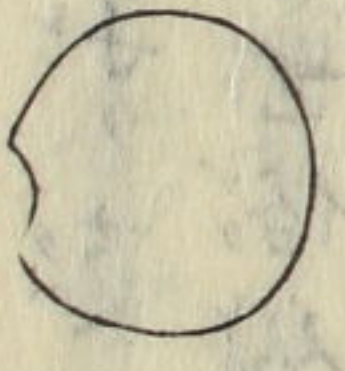
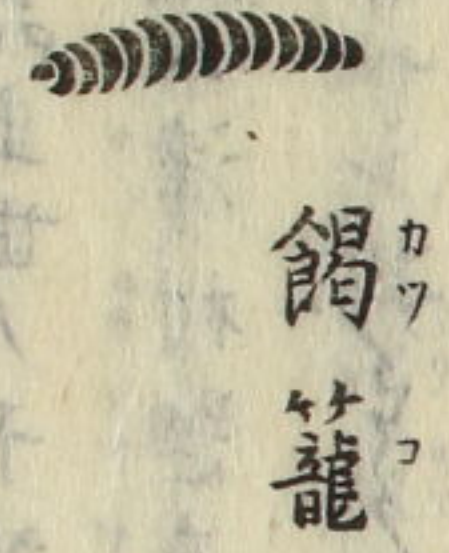
寧樂生連吉野 分山霞起隔高砂

旧都寂ニ烟波冷 春宴臘ニ夜月斜

芸得幽魂化為蝶 他生猶自在江家

東海平子文 朝野雜記云上世ノ千菓子四品アリ其

形左ノ如シ



止





空 菊の葉と油の漬みけりて食して五雜組に今人有采菊

葉煎麵茶食之者其味香而勝枸杞餅也

空 菖蒲茶とりの五山の傍の詩集より京華集云菖蒲茶

端午浮福住山終邊旬有茶多酒遇佳辰菓重九菖蒲五

椀中萬斛春又靈梅集云菖蒲茶半升鑪内煮輕柔椀二蒲

茶飽即休九節吳苗供一啜蜻蛉歛立釣絲頭又蒲筴蒲劍蒲

帶等山詩あり

蒲筴 端午

九節編成隨白鷗冷生四海一菴裏漁翁披得避風雨欲立蜻

蛟亦自由 蒲劍 伊州安國堂梅室獨吟百首

天下曾冷三尺安池蒲葉莫兼干晚風振起青銚影水底蛟

龍騰可寒

蒲帶

風蒲一帶結依二刑楚兒童端午衣為吊吳均吾太瘦青二

寸減腰圍

菖蒲と筴と太刀と帯とけ方の古六衛府の菖蒲

輿と菖蒲の枕と綾と類と

空 足利學校より不の歸藏抄易の玉弼注とけ仮名と講義と

来のちや季菰と巻の末文明丁酉十月廿日始之土月廿日終之滴

翠草亭より茶萬と云篆印あり其講義の中子間と當所の

不のちや季菰と巻の末文明丁酉十月廿日始之土月廿日終之滴

義皇ト云タソ其喜禪ノ語ラレタハ我易ヲ傳ル寸ニ鎌倉持氏ノ乱ニウソ

其時探著天下ノ乱ヲ占フ時コノ需ノ上六ニワウツ有<sup>アリ</sup>不速客三人来<sup>キタル</sup>云<sup>ヨリ</sup>自<sup>レ</sup>尔<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>  
 来<sup>カ</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>可<sup>ク</sup>否<sup>ク</sup>ソ<sup>レ</sup>後<sup>ニ</sup>鎌倉ノナリヲ仰<sup>ゴ</sup>ラセヨト云<sup>ハ</sup>レタリ又<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>後<sup>ニ</sup>重氏<sup>ノ</sup>出<sup>テ</sup>頭<sup>ト</sup>ノ  
 時<sup>ト</sup>足<sup>リ</sup>利<sup>キ</sup>ニ<sup>シ</sup>テ易<sup>キ</sup>ヲ構<sup>ム</sup>ズル寸<sup>チ</sup>持<sup>チ</sup>氏<sup>ノ</sup>時<sup>ト</sup>ノ筮<sup>ノ</sup>ヲ<sup>シ</sup>テ<sup>ハ</sup>サタスルニ其<sup>ノ</sup>占<sup>ム</sup>符<sup>ノ</sup>節<sup>ノ</sup>  
 ラ合<sup>ス</sup>セタルガ如<sup>ク</sup>シ其<sup>ノ</sup>故<sup>ハ</sup>重氏<sup>ノ</sup>出<sup>テ</sup>頭<sup>ト</sup>兄弟<sup>ノ</sup>三人<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>速<sup>ニ</sup>来<sup>テ</sup>重氏<sup>ヲ</sup>杖<sup>タ</sup>タリ  
 弟<sup>ハ</sup>美濃ノ土岐ニ養<sup>ハ</sup>セラレテ雪ノ下<sup>ニ</sup>殿<sup>ト</sup>云<sup>ハ</sup>タ一人<sup>也</sup>聖道<sup>テ</sup>アツタゾ又<sup>ニ</sup>  
 ノ弟<sup>ハ</sup>僧<sup>ガ</sup>一人<sup>ア</sup>ツタゾ又<sup>ニ</sup>重氏<sup>ノ</sup>一ノ兄<sup>ガ</sup>美濃ニアツタゾ其<sup>ノ</sup>俗<sup>人</sup>ゾ以上  
 三人<sup>来</sup>テ重氏<sup>ヲ</sup>杖<sup>タ</sup>ツ重氏<sup>ツ</sup>シニテ居<sup>ラ</sup>レタニヨツテ貞吉<sup>也</sup>今<sup>ニ</sup>テ  
 無<sup>ク</sup>為<sup>ル</sup>ナルハ奇特<sup>也</sup>易<sup>ヲ</sup>信<sup>ム</sup>者<sup>ヲ</sup>ト<sup>ラ</sup>バ違<sup>フ</sup>ハアルニイゾとあり此<sup>ノ</sup>事<sup>ハ</sup>  
 ありと新樂閑叟<sup>ノ</sup>話<sup>ナリ</sup>

南畝著言卷上 畢



此ノ事ハ新樂閑叟ノ話ナリ  
 南畝著言卷上 畢

